の桜川で、前記の磯部の桜で、徳川八代将軍吉宗は、大岡越前守に命じとこの桜を吉野の桜と共に小金井に移植させたし、水戸黄門光圀も水戸の見川に移し、桜川と命名したり、今日の皇居や飛鳥山の桜も、ここから移植したといわれている。

しかし、十数年前までは下流の土浦附近の桜川堤の桜が関東での指折の桜の名所となり、むしろ磯部の桜の地位を奪ってしまったかの観があったが、この下流の桜川の桜の歴史は新しいもので、あの道祖神の境内にある植樹碑によると、明治四十三年行方郡大和村の方で、沢田条蔵さんという方が奥さんの足の病気がなおった道祖神の神徳に感謝して桜樹二百本を植えたのが初まりであるとなっている。

しかし桜川の洪水を防ぐため改修工事によって桜樹が抜きとられ往時の面影はなくなった。しかしながら土浦の人々にとってやはり桜川の名は忘れられない。霞ケ浦とともにふるさとの象徴となっている。

試みに市内の高校の校歌をとってみてもいづれも桜川を歌わしんでいるし、校章にも用いられている。なんな

りゆれる桜のトンネルの下を行き交う人の波、桜並木を背に釣り糸をたれる人、ボートを漕ぐ人、川面に浮かぶ灯籠流しの火、秋になれば川面にうつる五色の煙火の美しさ等、桜川はやはり土浦の人にとって美しい思い出の泉である。しかし、このやさしい桜川も一度怒れば恐ろしい洪水となり、人々を悩ましたものである。殊に土浦の洪水は、霞ケ浦の逆水のため容易に水が退かないので被害は到底他と比較にならない。従って土浦の歴史は水との戦いであるといっても過言ではない。

享永年間（今から五百四十年位前）土浦に城を築いたといわれる今泉三郎が洪水の害を防ぐため、桜川の河道を現在のものに切換えた。（それまでは現在の亀城通から桜橋のところを流れ川口に注いでいた。）といわれているが、この時すでに水との戦いが始められていた。明治二十八、九年にかけて常磐線（当時日本鉄道株式会社海岸線といった）が開通して、この線路敷が霞ケ浦の逆水を防ぐ役目を果すことになり川口こう門の建設と相まって土浦を水禍から救う上に大きな力を発揮することに